近代日本仏教の西洋的起源—19 世紀における日欧交流史の一側面

日本仏教は様々な意味で、明治期の前半において著しい変化を受けた。従来檀家制度を通じて生計を立てていた僧侶は、新しく信徒を直接宗教的なメッセージで説得しなければならないようになった。仏教演説が流行ったのみではなく、様々な新しい発展が見られる。例えば、海外宣伝の開始、宗派を超えた入門書の執筆、社会福祉施設や学校の設立、世界宗教の一部である意識の出現などである。それらの変化をもたらした要素の一つとしては西洋の影響があげられる。先行研究においては、このような影響は基本的に認められているが、詳細にそれを研究分析されることがあまりない。本発表はこの近代日本仏教の西洋的起源を研究するために、明治 10 年代前後渡欧して直接思想や実践の国際交流を経験した日本仏教僧侶たちに焦点をおく。発表の対象は、彼らが日本だけではなく、ヨーロッパにも残した遺産である。